

「今まではどの程度、恋人と続いてたんですか？」

さらに尋ねると、臨也は腕を組み、少しだけ考えるそぶりを見せてから口を開いた。

「短いと一日、長いと……まあ、三ヶ月かな。平均すると一ヶ月つてところ」

うわあ、と、また思う。よくわからないけれど、それはたぶん、とても短い、のではなからうか。

「臨也さん、もしかして本気の恋愛とかつてしたことないんですか？」

「あるわけがないよ。俺は人間を愛してるから、一人だけ特別扱いになんてできないんだよね」

肩をすくめて臨也は言う。その台詞に、ああなるほど、と帝人は理解する。臨也は人間を彼の理論、彼の理屈で愛している。平均的に、全人類を。だから、彼は恋が出来ないのだ。相手のことが『特別』になる。それが恋というものなのだから。

……もともと、それを実感できるほどの恋をまだ帝人も知らないが。帝人が知る恋はあまりも淡くて、その『特別』をほんのりと意識する程度のものでしかない。

「いつかはしてみたいな、とちよつと思ってるけどね。本気の恋とやらをしたら、きつともつと人間を深く理解して、より愛せる気がするからさ」

（それは全人類のために遠慮したい未来のような気がする）

そんなことをぼんやりと思ったが、口には出さない。代わりに口にしたのは、全く別の言葉だった。

「じゃあ、飽きたらすぐに言ってくださいね」

「あ、バイトする気になったんだ？」

に、と彼は少し人の悪い笑みを浮かべる。そんなところも、美貌が際立って魅力的ではある。

「お察しの通り、今月は本当に厳しいんです」

愛用のパソコンが壊れてしまったので予想外の出費があった。しかもこの修理費が結構高額になってしまい、基本貧乏生活の帝人にとつては死活問題だ。だが、パソコンのない生活も考えられない。なので、何日かは絶食の覚悟だった。

それを思えば、悪趣味だとは思うが、臨也の持ちかけてきた『恋人ごっこ』とやらのアルバイトの話にのつてもまあいいかな、という気になる。

空腹を感じなくてすむし、誰かを裏切るとか傷つけるとかいふ話でもない。自分が多少、空しい気分にはなるだろうがそれだけだ。もしかしたら今以上に臨也の性格の悪さを知って人間不信になるかもしれないが、現時点で臨也を純粹に『いい人』と思っているわけでもないし、深刻な事態にはまず、ならない。

（たぶん、一週間か二週間、長くても一ヶ月くらいの話だろうし）

今まで歴代の恋人と続いたのが平均一ヶ月なら、おそらくはそれより短い期間で臨也は飽きるのではないか、という気がする。お互い恋していない以上、無駄でしかないからだ。それに、たぶん帝人は演技が臨也ほど上手くない。